

## ■第十三章 部分と原因で構築されたもの (compounded phenomena 有為) の考察

ここでは、言葉によって説明されるものの限界の問題が取り上げられていると言ってよいであろう。「部分と原因で構築されたもの」とは、つきつめて言えば、人間が概念を用いて (哲学的に) 認識できる事象のことになるからである。そしてこの問題は、第二十四章などで重点的に取り上げられる「空性の空性」という問題と直接関係している。ナーガールジュナはこの十三章で、空性そのものについて語り始めるのである。

### 1. 勝利を得た征服者 The Victorious Conqueror 1 は言った

何であれ見せかけのもの deceptive は偽り false である

部分と原因で構築されたもの compounded phenomena (有為) 2 はすべて

見せかけのものである

したがってそれらはすべて偽りである

### 1. 意識

ブッダは言った。どんなものでれ、見せかけだけのものは偽りなのである。(我々が普通に事象を見るとき、) 部分に分割でき、原因から成っているような (概念的構築) 物は (、そのもの固有の性質を持って独立して存在しているように見えるのであるが、それは) 見せかけなのであり、したがって (そのように実体的に見えている見かけは) すべて偽りである。

1. 「勝利を得た征服者」 The Victorious Conqueror というのはチベット語でブッダを形容する言い回しである。Garfield p.208

2. Skt: samskara, Tib: 'du byed. サムスカーラというこの言葉は一言で説明しにくいものであり、訳語も様々なものが充てられてきたのであるが、仏教の概念としては、現象的真実 (世俗諦) としてとらえられる普通の事象のことであり、その中でも特に、間違っ  
て実体的に見られることを予想した上で、その間違いを上から見て言った事物のあり方である。つまり、普通我々は個々の事物を暗黙のうちに一つの独立したものとしてとらえている。独立した本質を持つ実体というものは我々の認識手段では立証できないにもかかわらず、そのように思ってしまうのである。ところが実際はそう思って認識している事物は

概念によって構築されたものであり、原因に依存して因果関係的に理解され、言葉を用いてさらに部分に分割して行くことができるようなものなのである。したがって一つの実体ではあり得ない、概念合成物である。英語では compounded phenomena と言い、「合成された事象」という意味になる。したがって現代日本語ではその意をとって「原因と条件から生じるもの」などと訳されることがあるが、ここでは「部分と原因で構築されたもの」とすることにした。（「条件」という言葉が意味の上では「原因」と重複しているからである。）もっと簡単に「概念構築物」とした方がすっきりするのだが、そこまで行くと少し意識に過ぎるかもしれない。古くからの漢語では「有為」である。

-----

この詩で取り上げられているブッダの言葉は、間違っ理解される可能性がある。「部分と原因で構築されたものは見せかけで偽りである」の部分、普通に目に見えている事物はそのように見えているだけで、実は存在しない、と言っているように虚無的に解釈されかねないのである。あるいは後の唯識のように、見えているものは仮のものであり、本当は唯一の実体である「心」こそが実在しているのだ、などと言っているかのように理解しようとする者も出てくるだろう。つまり、概念によって把握される現象的真実をまったく否定しているととられかねないのである。しかしもちろんそうではない。「部分と原因で構築されているもの（概念構築物）」が一つの实体であるかのように見える、その見かけが偽りだと言っているのである。仏教において現象的真実、ときには真実だと言われ、ときには偽りだと表現されるので厄介である。その都度意味をよく吟味しなければならない。密教実践などにおける空性の瞑想は、空——つまり実体的見かけの偽りを、言葉による認識に頼らず直観的知覚によって経験し、事物をあるがままに見ることを目指すのであって、そうした方法を持つがゆえに単なる哲学的思考にとどまらず、救済というものが視野に入ってくるのであるが、そのような形而上の問題を言葉で論じる段になると混乱が起きる可能性があるので慎重にならなければならない。

2. 見せかけのものがすべて偽りなら  
何が欺いているのだろうか  
勝利を得た征服者はこれについて  
そのものの空性こそが完全に真実だと述べている

## 2. 意識

（そうすると反論者はこう問うだろう。）もし見せかけのものがすべて偽りだと言うなら、何が騙しているというのだろうか。（本当は存在しない事物が、存在しているようなふりをしているのだろうか。だとしたら、ふりをしている当の本人がどこかに存在しているのではないか。）それについてブッダは、個々の事物の存在については、その事物の空性こそが本当の真実だと述べている。

「何が本当に存在しているのか？」――「空が本当に存在している」、このような表現は「絶対なるものとしては何も存在していないということが絶対的に存在している」という二重の表現を意味しているようである。しかし、絶対ということは言葉によってはいかなる意味でも立証できないのであるから、空こそ真実と言っても、空が実体として存在している、という具合に理解してはならない。実体については、単に否定しかできないということである。否定形であることが最終的な表現であって（これについては後でまた述べる）、それをもう一度「否定の実体的真実」という具合に肯定表現に持ち込んではいられないのである。それを言うならば、空こそ本当だ、ということさえも絶対ではない、と表現しなければならなくなる。そしてその表現も絶対ではないのであり、．．．認識の限界を問えば永遠に循環する表現となる。こうした観点が次の詩に出てきている。

- 3. すべての事物は実在 entity（性 hood）を欠いている
- だからこそ変化が知覚されるのである
- 実在を除いては何も存在しない
- なぜならすべての事物が空性を持っているからである

## 3. 意識

すべての事物は永遠不変なる実体性など持っていないのである。だからこそ変化というものを我々は体験できるのである。（しかしこれに対して反論者はこう言うかもしれない。）最終的には実体こそが存在していると言えるのであり、実体を除いては存在するということは主張できない。なぜならば、すべての事物が空性を持っていると言っているのであるから、空性というものが実体的に存在しているのではないか。

#### 4. もし実在（性）が存在しなかったら

何が変化するのだろうか

もし実在するものがあるなら

何かが変化するということはどのように正しく主張できるのだろうか

#### 4. 意識

もし実体が存在するという事態があり得ないのであったら、何が変化するというのだろうか。（変化するということが自体が実体的真実でないならば、変化の主体がそもそも存在しないことになるのではないか——こう反論者は言うであろう。しかし、）もし不変の実体性ということが成立するならば、何かが変化するということが正しく主張できるだろうか。

反論者に対するナーガールジュナのここでの答え方は、絶対性という認識の不可能さを人間の限界の問題として直接説明するというものではなく、絶対性を主張した場合の矛盾から反証するという手を使っている。カントなどでお馴染みの西洋哲学の表現とは若干趣を異にしているのである。ナーガールジュナはあくまでも、反論によって詩を形作って行く。

#### 5. 事物それ自体は変化しない

何か別のものが変化するのでもない

なぜなら若い男は年を取らず

また年寄りの男もまた年を取らないからである

#### 5. 意識

（実体であるならば、その）事物それ自体は変化しないはずである。（だからといって、変化する前のものと変化した後のものが）別々のものであるなら、それは変化したのではないであろう。なぜなら、（もし事物が変化しない実体であり、二つの異なったものが存在しているだけであるなら、）不変の実体としての若い男は年を取ることなく存在しており、それとは別の年寄りの男も、すでに年を取っている状態の実体なのであればそれ以上年を取らないで存在しているだけだからである。

何かが変化するというときの、変化するもの同士の同一性が実体的な同一性であるはずはない。厳密に同一なら変化していないということだからである。変化とは関係性であり、関係性における同一性とは、相互に関連し合って成立するような二つのものが、その変化という関係を通して同一だとされながら、相互のあり方を変えているのである。ある人が年を取ったという場合、年を取る前と後との人物の同一性や、動く前と後の人物の同一性は経験的判断であると同時に認識の前提である。昨日の自分と今日の自分が同一だと思うのも、我々の主観がそのように経験されるからである。経験の外に実体として存在しているような絶対的同一性などというものは、我々には問えない。

6. もし事物それ自体が変化するなら  
牛乳自体が凝乳 curd であり得ることだろう  
そうでなければ、凝乳が  
牛乳とは別の実体となり得たことだろう

#### 6. 意識

もし固有の本質を持った実体的な事物が変化しても同一のものだというなら、牛乳が同時に凝固した牛乳でもあることだろう。それが違うというなら、凝乳と牛乳はまったく別の二つの実体だということになるだろう。（その場合は牛乳が凝乳に変化するなどということは起こり得ない。）

7. もしほんのわずかにでも triffle 空でないもの nonempty が存在するのなら  
空性それ自体がとるに足りないもの triffle となってしまうだろう  
空でないものはわずかなものではなくなってしまう  
どうしたら空性が実在となり得るだろうか

#### 7. 意識

（空性というものが、事物の性質のうちの一つであり、）たとえわずかなものであっても、空でない事物も存在するという実例があるのなら、空性というものは意味のないものとなってしまうだろう。その場合、存在している「空でないもの」とは実体であることになり、わずかに存在している実例などと言うだけでは済まされないものとなってしまうの

である。（実体は確実に、永遠に存在するものなのであるから。）空性は（すべての事物の性質であり、わずかな部分的例外としてでさえ、）空でない実体的実在などにはなり得ないのである。

空性というものは、「すべての」事物がそうであるような性質であり、ある特定のものがそうであり、他のものはそうではないというような性質ではない。もちろん、空でない存在様態が本来のものであり、たまたまそこから空性という存在様態も派生してくる、などという種類のものでもない。空性は例外のないすべての事物にとっての性質であり、実体とは相容れないという性質である。

#### 8. 勝者たちはこう語ってきた

空性とはすべての見解を放棄することである  
誰であれ空性が一つの見解であるような者には  
何もなし遂げることはできないであろう

#### 8. 意識

悟りを勝ち得たブッダたちは常にこう語ってきた。空性とは、（絶対的本質を持った実体として何かが存在するのだと見てしまうような）すべての見解を放棄することである。

（ここには事物の実体的存在というものだけにとどまらず、絶対的「真実」というものが存在するという主張も含まれる。）誰であれ、空性というものが、主張し得る絶対的な見解であるような者には、悟りを成就することはできないであろう。

ここで「見解」 view, Skt: drsti, Tib: lta-ba とされていることの意味は解釈者の間でも混乱のあるところである。しかし、全体として意味の通る見方は限られてくるのであり、中観派はこう解釈している。つまり、「見解」とは、「本質的見解」という意味であり、何かが「絶対的に」正しいと主張し得るような意味での見解である、と。空性――依存的にしか物事が存在できないということ――こそが究極の真実である、と表現することは、「絶対的な存在というものは存在しない」と言うことであり、先に言及した通り、「絶対などということは絶対言えない！」と言うことである。これは人間が論理を用いる場合の避けられない矛盾である。中観派の中にも、何かを「否定」することは絶対的真実

の「主張（肯定）」とは別であるという具合に解釈し、「否定」の論法の中に究極的真実として空性を主張できる論理があるかのように言う者もいるが 3、結局はそれも、真実を主張するときの人間の限界の問題の扱い方の一つであり、言い方の違いだと理解しておく以外にないであろう。いずれにしても、ここで「見解」と言われていることの意味は、絶対的な本質を持った見解、という意味であり、それをとり違えると論理がおかしくなることは間違いない。何度も繰り返すが、ブッダたちが究極の真実を知っているとするならば、それは彼らが論理の外側に出る経験をしているということが前提となっているのであり、そのことは性質上言葉にはならないし、少なくとも便宜的にしか主張できない形而上の見解である。しかしそれを除いては救済もあり得ない。

3. ガーフィールドはこの問題について、店に入って行って売り物が何もないことを知った上で、店主に「商品でないもの」を売ってくれと頼む者に例えているチャンドラキールティと、「理論の批判は理論ではない。批判とはむしろ、理論とは何であるか、どのようにそれが形成されたかという認識であり、新しい理論の提案ではないのである。見解の否定というものも、新たなる見解だというわけではない。」と述べた Multi を紹介している。Garfield pp.213-214